

「光あれ」

創世記 1章 1節～5節
コロサイ人への手紙 1章 15節～20節

説教 軽込 昇牧師

「光あれ」（創世記1章3節）という言葉によって世界が創造されました。これはイスラエルの人々の信仰告白ですが、すんなりと出てきたものではありません。生きていけるかわからないギリギリの状況でなされたものです。神様を世界の創造者と信じる告白は、私たちが礼拝で唱和する「日本基督教団信仰告白」の中にある「使徒信条」にも受け継がれています。信仰告白には、神様に向けたものと他の人に向けたものがありますが、礼拝では前者を目的とします。

今年の日本は多くの災害に見舞われました。そんなとき、神様はなぜこのようなことをお許しになるのか、と問いたくなります。そう問いながら神様にくっついてかかることは不信仰ではありません。むしろ、神様と出会っていない人やみ前に道を求める人のためにも、そういう問いかけをすることがクリスチャンの役割です。

イスラエルの国は、ダビデ王、ソロモン王の繁栄の後に南北に分断されました。創世記第1章のまとめられた頃には、北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされました。アッシリアの強制移住・混血政策によりサマリア人が出現し、その後の対立と混乱のもとになりました。紀元前587年、南のユダ王国も滅亡し、多くの人々がバビロニアに連れて行かれました。これがバビロン捕囚です。

イスラエルの人々の間には、自分たちは「神の民」という信仰がありました。しかし、バビロン捕囚によって、その信仰はゆらぎました。捕囚は、外からの災難というだけでなく、内側からも問題を露呈するものでした。こういう苦難の中で神に問いかける切実さの中から、神による世界の創造を信じるという告白は出てきたのです。「神様なぜですか」と問いかけるとき、直接の答えはすぐには得られないかもしれませんが、それでも、私たちが神によって創造されたものであると信じ、告白することで、私たちは改めて神の愛を知ることができるのです。

創世記のはじめの「地」は混沌で、形のない闇と淵でした。そこをおおった神の霊は激しい風のようなものです。その霊の動きに続いて、「光あれ」という言葉が発せられました。これが天地の始まりの話です。また、主イエスは、世の終わりには不

法がはびこり愛が冷えるとおっしゃっています（マタイによる福音書24章3節・12節）。ある書物で読んだことを思い起こします。戦争中、夫の実家に身を寄せた家族は離れてひもじい思いをしていたが、夫だけは母屋に呼ばれて何かを食べたようであった。戦後に夫婦は別れたが、そのことが原因であったろうと。

イスラエルの人々の神様への切実な訴えが舞台で繰り広げられているとしたとき、私たちはただそれを観客席で見ているだけではいけません。イスラエルの人々の信仰告白は、主イエスの名により新しく受け取るべきものです。クリスマスを前にして、世界が神のことばによって創られたことを改めて思い起こしましょう。

コロサイ人への手紙1章16～17節では、万物はみな御子にあって造られ、御子は万物より先にあるといわれています。神が私たちが創り、神が私たちをお救いになるのです。「光あれ」の先に私たちがいます。神が創造したものを「良しとされた」ということは、私たちの人生も生きるに値するものとして神に肯定されているということです。また、その創造より前に神の身分にあられた御子イエスが私たちの救いのために世に降ってくださったことにも神の愛があります。何より、御子イエスが十字架上で流す血潮で平和をつくり、神と世とを和解させてくださったことに大きな神の愛があります。

イザヤ書40章1～2節、エゼキエル書18章31～32節は、バビロン捕囚を背景として、「慰めよ」「ねんごろにエルサレムに語り」「新しい心と、新しい霊とを得よ」「翻って生きよ」といいます。「ねんごろに」とは「ひざをつきあわせて」という意味です。私がかつて葬儀を執り行った人は、ノートに「主の祈りが祈れない」と書き残し、数日後に召されました。私は、イエス様があなたの手にご自分の手を重ねて祈っておられた、と心の中で語りかけながら、葬儀を行いました。

私たちの人生は、神に愛された者として生きる価値のあるものです。

（記 説教要約奉仕者）